

## (続) 津田青楓宛て書簡にみる寺田寅彦の二つの世界

四宮義正

『榊』90号に「津田青楓宛て書簡にみる寺田寅彦の二つの世界」を投稿したが、その後、寺田寅彦記念館友の会の山田功さんから三点の奥深いご感想・ご指摘をいただいた。まず問題の絵（大正7年2月3日付書簡）を下に再掲する。

（その1）はX線発生装置の絵で、二重コイルの上側に電池が接続されているが、これは間違っているのではないかと、ということである。私は電池の記号に気がつかなかったのであるが、他の文献を見ても、確かに上側の線は二次側であり、X線管につながるものが普通である。前稿の挿入図「X線発生装置（『山川健次郎と藤田哲也展図録』収載）でも確かにそうになっている。思い違いがあったのだろう。

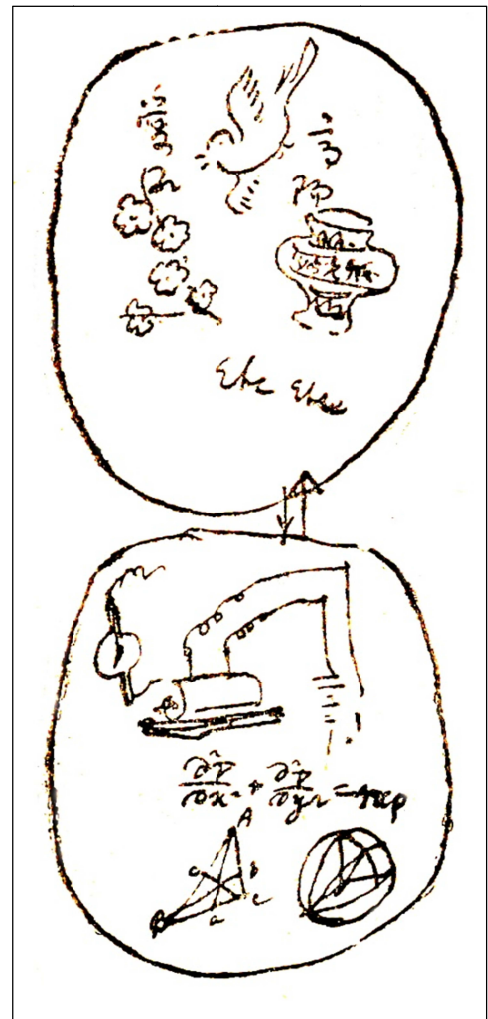
（その2）は当時の線管はクーリッジ管ではなくガスX管である、とのことである。改めて、論文「On the Transmission of X-Rays through Crystals.」（「X線の結晶透過について」）を調べてみると、

The X-ray bulb used was a Müller-Uri tube of 20 cm diameter, with the ordinary attachment for water-cooling and automatic regulation. The current was supplied by a Toepler influence machine with sixty plates, turning 16 - 17 times per second.

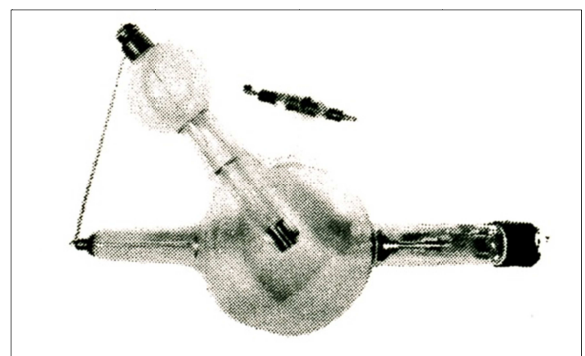
と書かれている。拙訳によると、「X線管は一般的な自動調節水冷装置が付属した直径20センチのミュラー-ウリ管が使われた。電流は60枚の円板を持つテプラー誘導起電機から回転数16～17回/秒で供給された。」となる。

小泉菊太『わが国におけるX線管の歩み』（昭和51年12月20日、ソフテックス映像研究所）に該当しそうな写真が出ていた。（右）

以下のような説明がある。



津田青楓宛て書簡の絵



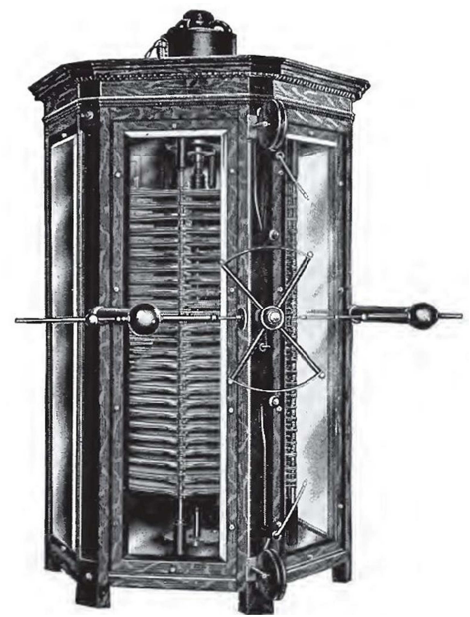
水冷式ガスX線管 ラビット

品名：ラビット 製造社：(独) ミュラー社 年代：  
1914年（大正3）ごろ 形状：径20cmφ、長77  
cm 説明：わが国へ最も多く輸入された管球の一  
種で非常に親しまれたものである。タングステン  
極で水冷。

寅彦の絵は小さいが、実験で使用したのはおそらく  
このタイプであろう。

また、『櫛』80号にテプラー起電機の絵を出したが、  
その時も山田さんから、これはデモ用で寅彦が実験に  
使用したものではない、との指摘もいただいていた。

該当しそうな写真を探したが見つからなかった。し  
かし医療用・X線電源用として右の写真が出てきた。  
縦型である。上にモーターがあるように見える。参考に  
示す。



テプラー—ホルツ型起電機  
縦型、100枚プレート  
(円板直径31インチ≒79cm)

ちなみに、留学中の日記「北欧旅行記」にはダンチヒやケーニッヒスベルクの学校で40  
枚や60枚のテプラー起電機を見学したことが書かれている。普及していたのである。

（その3）は壺について、縄文土器が評価されだしたのは、岡本太郎の審美眼によると  
ころが大きく、時代的に寅彦が縄文土器を美の対象としていたとは考えにくく、むしろ有  
田や伊万里の陶磁器、中国の壺といったところではないだろうか、とのご指摘である。

また、山田一郎『寺田寅彦覚書』（昭和56年11月27日、岩波書店）277頁の写真のご  
教示もあった。（写真省略）利正の収集した茶器が多数写っており、図とよく似た形の物も  
ある。茶釜か風炉かもしれない。利正の死後に高陽の絵十点など、僅かを残しただけで売  
ってしまったようであるが、記憶に残っていて青楓宛ての手紙に描いたのかもしれない。

しかし、特に寅彦の上側の絵については、厳密な同一性  
をもって追究することは難しいので、形の類似性によって  
漱石、青楓関連から探してみた。

#### ①壺の絵

対象を世界に広げてネットで探していたところ、イタリ  
ア陶器に面白い形があった。『イタリア・ファエンツァ国際  
陶芸博物館所蔵 マジョリカ名陶展』（2001年2月、日本  
経済新聞社）は展示会の図録であるが、いろいろな形や模  
様の陶器の写真が出ている。寅彦の絵に似ている壺を右に  
示す。



人物図壺（マジョリカ、  
ナポリ窯、16世紀前半）

寅彦は明治 42 年（1909）1 月の『ホトトギス』に「まじょりか皿」を発表している。以下に一部を引用する。

竹村君がこの皿を買おうと思いついたのは久しい前の事である。いつか同郷の先輩の書齋で美しい絵のついた長方形の浅いペン皿を見た事がある。その時これがまじょりかといって安くないものだと教えられた。その後この文房具店で同じような色々の皿を見つけて一つ欲しいと思いついたが、今日まで機会がなかったのである。今夜買ったのは半月形で蒼海原に帆を孕んだ三本檣の巨船の絵である。夕日を受けた帆は柔らかい卵子色をしている。海と空の深い透明な色を見ていると、何かしら遠いゆかしいような想いがするのを喜んで買った。

この作品は洋行前の発表であるが、留学中にイタリアへ旅行しているので、博物館や骨董店で見たマジョリカ焼きを覚えていたと考えるのも面白い。

また、内田百閒の「百鬼園日記帖」（六十）〔大正 6 年〕に、百閒が漱石からマジョリカの皿（別のところではペン皿とある）を貰ったことが書かれている。作中の「同郷の先輩」とは漱石がモデルになっているのかもしれない。

壺といえば、岩波書店のマークが思い浮かぶ。今はミレーの種蒔く人であるが、初期は橋口五葉デザインの壺（甕）マークが使用され、寅彦の随筆集の箱や裏表紙にも付いている。



岩波書店 壺マーク

## ② 花卉（梅）の絵

『漱石書画集』（昭和 51 年 6 月 28 日、岩波書店）に、「青嶂紅梅図」という南画風の淡彩山水画が出ている。岩山を背景に桃色の花木が一面に続いている絵である。華やかさからして桃花のようで、寅彦の桃源郷の世界を表しているような気がする。しかし題のように梅花なのだろう。梅には色の濃い種類があるし、葉が出る前に咲くので、集っていればこのように見えるのだろう。「大正四年十月下浣写於 漾虚碧堂漱石山人」と書かれている。漱石が亡くなる一年前である。この絵を前にして師と歓談したのかもしれない。



漱石作「青嶂紅梅図」  
（部分）

## ③ 小鳥の絵

この手紙が書かれた頃の漱石著作本の装幀を見ると